



地域連携推進監
下村武治 先生

「対話」を重視したカリキュラムで 自らポテンシャルを上げていける力を伸ばし 行政・市民と共に「地域リーダー」を育成

地域を知り、地域への誇りや
愛着をもった生徒を育てたい

2019年度より文部科学省委託事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」に指定された榛原高校。地域の課題解決のために必要な人材を育成し、還流させることを目的にした「HAFプロジェクト(HAIBARA ACHIEVING FUTURES PROJECT)」により、地域と連携しながらグローバルリーダーの育成に取り組んでいる。

遡ること5年前、下村武治先生をはじめ一部の教員は、榛原高校の未来に大きな危機感をもっていた。

「地域の人口減少・少子化が進むなか、このままでは10年後の榛原高校は存続さえ危ぶまれるだろうと感じていました。一方で、生徒は親と学校の先生以外の大人と話す機会がなく、地域とのつながりもない。将来的に地元に戻るという選択肢をもたせるためにも、地域のことを知り、地域への誇りや愛着をもった生徒を育てたいと考えるよう

になりました」

一方、同校のある牧之原市では「対話によるまちづくり」を進めており、2016年度には高校生や大学生、地域住民らが「対話」を通して地域課題の解決に取り組む「地域リーダー育成プロジェクト(CLIP)」が立ち上がった。

参加した生徒たちは、大人たちが地域への思いを語るのを聞き、地域の魅力に気づき、直面する課題を目的の当りにした。また、市が育成・認定する「市民ファシリテーター」から対話やファシリテーションのルールや手法を学び、実践することを通して、ファシリテーターとしての経験値や対話力も身につけていったという。

「CLIPは放課後に開催されるので、いわゆるリーダータイプの生徒は部活動などの活動で忙しくて参加できず、参加したのは部活動などはしていないくても勉強もそこそこ...という、いわゆる目立たない生徒がほとんどでした。その彼ら彼女らが、CLIPの活動を通して、私たち教員も驚くほどに成長したのです。積極的に自分の意見を発言

したり、グループワークを進めるのが上手になったり。目の色も表情も入学時とはまったく異なり、低かった自尊心も高まったようでした」

市民ファシリテーターによる
研修を総学で全員が受講

CLIPに参加した生徒たちの変容を目的の当りにし、「あの子たちのように他の生徒たちも地域の人と関わり、対話力を身につけてほしい」と考えた下村先生らは、2018年度から総合的な学習の時間「榛高タイム」のカリキュラムに市民ファシリテーターによる「ファシリテーション研修」を盛り込んだ。1年生の最初に2時間を使って、全員が対話の進め方とグラフィックレコーディング(イラストなどのビジュアル要素を用いて議事録をまとめる手法)について学び、その後の探究活動に活かしていく。1年生の「榛高タイム」では地域の課題探究、2年生では地元以外の地域(修学旅行先)の課題探究、3年生では大学での学び(志望校)の探究を行う。市民ファシリテーターと

地域連携によるカリキュラムの概要

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1学年	ファシリテーション研修	市長出前講話	地域の課題探究	企業人講話	総合的な学習の日	企業訪問	地域の課題探究	台湾研修	成果発表会	研修成果発表会	
2学年	修学旅行に向けての地域探究学習			アメリカ研修(事前・事後)			キャリア探究	研修成果発表会			
全学年	イングリッシュキャンプ			定時制課程生徒との交流							
	地域リーダー育成プロジェクト(CLIP)										

■ 榛高タイム(総合的な学習の時間) ■ 希望者対象

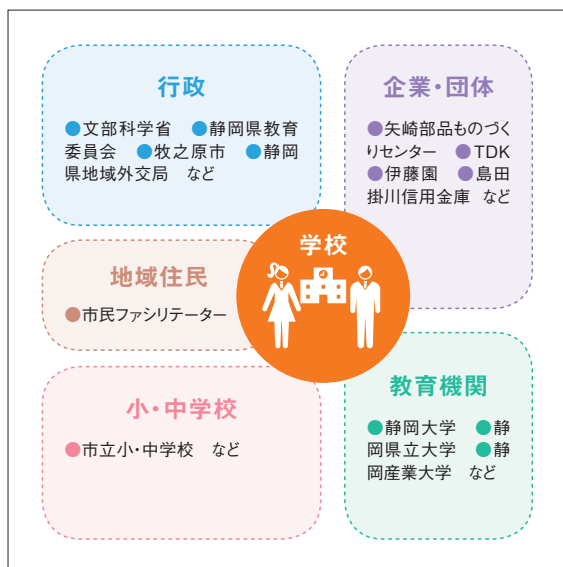
取材・文/笹原風花

学校データ

1900年設立/普通科・理数科・定時制/生徒数693人(男子387人・女子306人)/
進路状況(2019年3月実績)大学171人・短大10人・専門学校17人・その他23人



地域社会と協力し、生徒を育てる体制



「さいたまファシリテーション講座」に参加した生徒が描いたグラフィックレコード(写真上)。ファシリテーション研修では、生徒がファシリテーターを務めながら実践的に対話の進め方を学ぶ(写真下)。

の連携具合は各学年担当に任せているが、年に2〜3回は授業に入ってもらおう。
一方、通常のプロジェクト形式だったCLIPは、より多くの生徒が参加しやすいよう2019年度よりプログラム方式に変更。地元企業などが主催す

るプログラムと市民ファシリテーターによるプログラムがあり、参加回数によって修了証や認定証が市より交付される。授業でファシリテーション研修を受け興味をもった生徒は、このプログラムでさらに追求できるようにしている。

地域リーダーの育成に加え、同校では2015年度以降、文部科学省委託事業や静岡県教育委員会の事業などに積極的に取り組み、企業による出張講座、地元の企業・事業所訪問、海外研修、研修・体験型のサイエンスプログラム(理数科)など、多様な外部機関や人材との連携を進めてきた。こうした取り組みを統合・体系化するかたちで、2019年度にHAFプロジェクトを開始。「世界を見つめ地元を愛するグローバルリーダー」の育成を目指すことになった。新たに静岡大学教育学部と連携協定を結び、「総合的な学習の日」に普通科1年生が大学で研修を受けるなど、具体的な取組も始まっている。

生徒に対話力がつき、議論や理解が深まる

全員がファシリテーション研修を受講するようになり、生徒には教員が驚くほどの変化が出ているという。

「探究などの授業でグループワークを行う際も、とてもスムーズです。自分たちで役割を決めて進め、ここは安心・安全の場だという対話のルールが共通理解としてあるので、意見もどんどん

出てきます。生徒の間に共通のベースがあるだけでこんなに違うんだと実感しています。また、昨年度から企業人講話に市民ファシリテーターに入ってもらう、話を聞いた後にグループワークの時間を設けるスタイルにしたところ、議論も理解もとても深まりました。話を聞いて感想文を書くだけの昨年度と比べて、衝撃的な変化でした」

一方で、課題もある。地域連携の進んだ学校だという周知がまだ足りないこと、そして保護者の理解が十分ではないことだ。

「手厚い指導を求める保護者が多いなか、生きていくためには自分で自分のポテンシャルを上げていくことが大事であり、そういう生徒を育てるために探究や地域リーダー育成プロジェクトがあるのだと伝えていく必要があると感じています。逆に言うと、今まではそうした教育をしてこなかったということです。そんな時間があれば勉強しろと、私たちが生徒の機会を潰していたのかもしれませんが、もちろん教科学習も大事ですが、多様な人々と関わり地域の現実を知るなかで、自らの在り方や今後について考える時間も、同様に大事だと考えています」

これまでの積み重ねや内省のうえに立ち上がったHAFプロジェクト。今後は「走りながら試行錯誤を続け、こうあるべきにとらわれず、より良いものにしていきたい」と下村先生は締めくくった。

生徒's EYE

対話の手法や地域課題を学び、考え方や見方が変わった

●先生に誘われて参加したCLIPでしたが、次第に活動にハマっていききました。以前は批判されたらどうしようという恐怖心から、意見があってもなかなか言い出せずにいたのですが、CLIPで相手の意見を頭から否定しないなどの対話のルールを学び、安心できる場で対話をするうちに、人の意見を聞き自分の意見を発し、人の意見を引き出せるようになりました。(曾根さん)

●CLIPで学んだ対話の手法は、学校でみんな話して何かを決めるときなどにも大いに役立っています。また、CLIPで多くの人と出会い、地域課題の解決のためにがんばっている大人の姿を目の当たりにし、これまでは気にしていなかった地域のことに関心を持っていくようになりました。(松本さん)

●以前は人と話すことが苦手でしたが、CLIPでは「やりたい」と言ったことをみんなが応援してくれて、高校生でも発信すればやりたいことを実現できるんだと自信ができました。大々ではまちづくりについて学び、卒業後は地元に戻って地域課題の解決に取り組みたいと考えています。(山下さん)



左から、3学年の曾根 直さん、松本 恵実花さん、山下 友梨子さん。